C-4

モンゴル語アラシャ方言の阻害音に見られる脱オイラト語化と中間性

外賀葵
（京都大学大学院/日本学術振興会特別研究員 DC）
takenoko2451@gmail.com

【要旨】モンゴル語アラシャ方言は、モンゴル諸語のうち、元来オイラト系諸語（以下、オイラト語）に属するが、内モンゴル諸方言の干渉を受けた結果、オイラト語的特徴の一部を失い、内モンゴル方言との「中間的」方言として位置づけられてきた。しかしながら、脱オイラト語化と中間性の実態について、従来具体的には論じられていない。本発表では、まず阻害音/k/の音声実現の実態から、脱オイラト語化が 50 代以下の話者に顕著であることを明らかにした上で、モンゴル祖語の*k, *q の摩擦音化の過程において、アラシャ方言が 1 つの中間的な段階にあることに言及する。次に破擦音/č/, /ǰ/の音声実現の実態から、内モンゴルの他方言と同様の特徴を持つ例に着目し、言語接触の影響の可能性を指摘したのち、モンゴル祖語の* č, * ǰ の通時的変化の過程において、脱口蓋化による分裂後、一部が口蓋化により中和しているという脱オイラト語化の過程にあることを示す。

1. はじめに

本発表で対象とするモンゴル語アラシャ方言（以下、アラシャ方言）とは、モンゴル諸語のうち、中国の内モンゴル自治区の西部に位置するアラシャ盟で話される、モンゴル語の変種の 1 つである（図 1，2 参照、緑で囲った部分がアラシャ方言を指す。図 1 は斎藤（2012:64）をもとに Janhunen (2003)等を参照し、図 2 は栗林（1989:1429）をもとに発表者が作成）。斎藤（2012:65-66）にも示されるように、モンゴル諸語の分類には諸説あり、系統関係について統一の見地には至っていない。

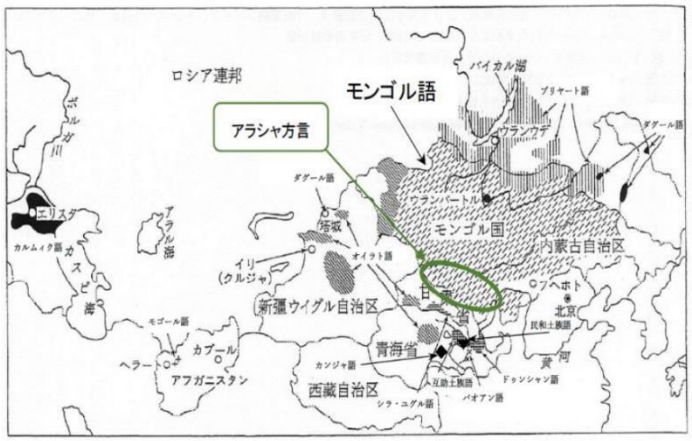

図 1．モンゴル諸語の分布

図 2．内モンゴル方言の分布

栗林（1988: 973）によると、モンゴル語アラシャ方言は、内モンゴル方言の干渉を受けた結果、オイラト語的特徴の一部を失い、内モンゴル方言との「中間的」方言に位置づけられるという。格日勒図（2013:1）も同様に、アラシャ方言が本来的にオイラト語（方言）と同様の特徴を有する一方で、内モンゴル東部のホルチン方言等だけでなく、中部のチャハル方言（内モンゴルの標準モンゴル語方

言）等の影響も受けていると述べている。しかしながら、脱オイラト語化と中間性の実態について、従来具体的には論じられてこなかった。本発表では、まず阻害音/k/の音声実現の実態から、脱オイラト語化が 50 代以下の話者に顕著であることを明らかにした上で、モンゴル祖語の*k, *q の摩擦音化の過程において、アラシャ方言が 1 つの中間的な段階にあることに言及する。次に破擦音/č/, /ǰ/の音声実現の実態から、内モンゴルの他方言と同様の特徴を持つ例に着目し、言語接触の影響の可能性を指摘したのち、モンゴル祖語の* č, * ǰ の通時的変化の過程において、脱口蓋化による分裂後、一部が口蓋化により中和しているという脱オイラト語化の過程にあることを示す。

2. 先行研究

アラシャ方言の体系的記述を試みたものとしては、格日勒图（2013）があるが、基礎的な記述にとどまっているほか、伝統的なモンゴル語学の慣習を踏襲しているという問題点がある。方言地理学の観点から、アラシャ方言の地域差について記述したものには哈斯图亚（2011）があるが、コードスイッチや世代差といった他の社会言語学的観点からの記述や、通時的視点も取り入れた体系的な記述はいまだなされていない。

広義の「オイラト語」には、モンゴル国オイラト方言、ロシア連邦カルムイク共和国のカルムイク語、中国新疆ウイグル自治区のオイラト語、中国青海省および甘粛省のオイラト方言等が含まれる(栗林 1988a, 栗林 1988b, Birtalan 2003, S・嫫嫫, Y・孟和阿木古楞 1990 等)。アラシャ方言は、中国内モンゴルのモンゴル語方言の 1 つであると分類される一方で、Birtalan (2003:211)のように、「オイラト語」の方言の 1 つとしても分類される。

阻害音/k/については表 1（栗林 1988a: 972 による）、破擦音/č/, /ǰ/については表 2（栗林 1989: 1432 による）に示すような蒙古文語との対応が見られる。なお蒙古文語の k, č, ǰ は、モンゴル祖語の*k, * č, * ǰ に遡るものである。対応するアラシャ方言の音形として格日勒图（2013）は、/k/: [k]、/č/: [tʃ](i の前), [ts～tʂ](その他)、/ǰ/: [dʒ](i の前), [dz](その他)であると述べている。アラシャ方言の/k/に対して、閉鎖の有無によりオイラト語的であるかを判断できる。/č/, /ǰ/に対しては、母音 i の前とそれ以外の場合とで振る舞いが異なるかによって、従来の記述に則っているかを判断可能である。

表 1. /k/の蒙古文語との対応

蒙古文語	オイラト語	非オイラト語	
		ハルハ・モンゴル語等	
k	k	x	
(例)	**k**ereg	**x**ereg	「事、用事」
	kü:kən	**xü:x**üŋ	「少女」

表 2. /č/, /ǰ/の蒙古文語との対応

蒙古文語	環境	アラシャ方言	内モンゴルの他方言	
			チャハル等	ホルチン等
č	母音iの前	tʃ	tʃ	ʃ
	それ以外	**ts**	tʃ	ʃ
ǰ	母音iの前	dʒ	dʒ	dʒ
	それ以外	**dz**	dʒ	dʒ

表 3. 話者の基本情報

	生年	調査時の年齢	性別
話者 A	1939 年	81 歳	女性
話者 B	1957 年	63 歳	男性
話者 C	1968 年	52 歳	男性
話者 D	1971 年	49 歳	男性
話者 E	1971 年	49 歳	女性
話者 F	1973 年	47 歳	女性
話者 G	1981 年	39 歳	女性
話者 H	2010 年	10 歳	男性

3. 調査概要

発表者は、2020 年 1 月 26 日～27 日の期間にアラシャ左旗にて、アラシャ方言話者 8 名（表 3 参照）を対象に、テキストの読み上げ調査を実施した。使用したテキストは、モンゴル文字で書かれた中高生用のモンゴル語作文の教科書である东北三省蒙古文教材编委会

（編）（2009）から選択した、「試験」（pp.202-203, 以下、テキスト 1）と「旧正月」（pp.220-221, テキスト 2）という題目の 2 編と、額尔德尼・格日勒玛（编）（1990: 266）の「十干十二支」（テキスト 3）の 3 つである。なお分析の際には、誤読や読み飛ばし等は除外したため、次節以降で示すデータにおいて話者ごとに母数が異なる場合がある。

4. 阻害音/k/の分析

4.1. データ

/k/の実現について、話者・テキスト別にまとめると表 4 の通りとなる（塗りつぶし箇所は、読み上げがなかったことを示す）。/k/は音声的に、閉鎖音[k], 破擦音[kx], 摩擦音[x]という 3 種で実現した。この結果は、格日勒图（2013）が音素/k/に対して[k]のみを記述していた点とは異なるものである。また、[k], [kx], [x]のうち、世代を問わず、総合的に最も出現回数が多く現れやすいのは、閉鎖音[k]ではなく摩擦音[x]であることが見て取れる。

表 4. /k/の実現（話者・テキスト別）

	テキスト1			テキスト2			テキスト3		
話者	[k]	[kx]	[x]	[k]	[kx]	[x]	[k]	[kx]	[x]
A	13/34	2/34	19/34				3/6	0/6	3/6
B	13/24	1/24	10/24				4/6	1/6	1/6
C	4/34	3/34	27/34	3/25	2/25	20/25	5/6	0/6	1/6
D	0/34	1/34	33/34	2/25	0/25	23/25	2/6	0/6	4/6
E	2/34	1/34	31/34	2/25	0/25	23/25	1/6	0/6	5/6
F	7/34	1/34	26/34	3/24	0/24	21/24	1/6	0/6	5/6
G	4/34	1/34	29/34	3/25	0/25	22/25	1/6	0/6	5/6
H	1/34	2/34	31/34	1/24	0/24	23/24	1/6	0/6	5/6

阻害音/k/に見られるオイラト語的特徴である、閉鎖有りで出現する場合の頻度と確率を表 5 に示す。オイラト語的であることを閉鎖音[k]で現れることとする立場を左方に、閉鎖有り、すなわち閉鎖音と破擦音で現れることとする立場を右方にまとめた。いずれの立場においても、話者 A, B と話者 C～H の間に差異が大きく見受けられる。世代差を踏まえて考察すると、阻害音/k/に見られるオイラト語的特徴は、60 代以上では約 50%保持される一方で、50 代以下ではせいぜい 20%程度しか保持されていないと言える。

表 5. /k/が閉鎖有で出現する頻度と確率

	[k]の出現		[k],[kx]の出現	
話者	頻度	確率	頻度	確率
A	16/40	40%	18/40	45%
B	17/30	57%	19/30	63%
C	12/65	18%	17/65	26%
D	4/65	6%	5/65	8%
E	5/65	8%	6/65	9%
F	11/64	17%	12/64	19%
G	8/65	12%	9/65	14%
H	3/64	5%	5/64	8%

続いて、オイラト語的特徴を保持する場合の/k/の実現において、その出現環境について考察を行う。語内の位置（語頭、語中、語末）から考察した結果を表 6 と表 8 に、/k/に後続する母音の種類（/k/は「i」,「e」,「ü, ö」のいずれかの前でしか現れない）から考察した結果を表 7 と表 9 に、それぞれ示す。

表 6. /k/が閉鎖有で出現する環境（話者・位置別）

話者		語頭	語中	語末
A	[k]	14/16	1/16	1/16
	[kx]	0/2	0/2	2/2
B	[k]	12/17	2/17	3/17
	[kx]	0/2	2/2	0/2
C	[k]	9/12	3/12	0/12
	[kx]	4/5	0/5	1/5
D	[k]	4/4	0/4	0/4
	[kx]	1/1	0/1	0/1
E	[k]	3/5	2/5	0/5
	[kx]	0/1	0/1	1/1
F	[k]	7/11	4/11	0/11
	[kx]	0/1	1/1	0/1
G	[k]	3/8	4/8	1/8
	[kx]	0/1	1/1	0/1
H	[k]	2/3	1/3	0/3
	[kx]	2/2	0/2	0/2

表 7. /k/が閉鎖有で出現する環境（話者・母音別）

話者		i	e	ü, ö
A	[k]	6/16	4/16	6/16
	[kx]	1/2	0/2	1/2
B	[k]	9/17	3/17	5/17
	[kx]	1/2	1/2	0/2
C	[k]	5/12	4/12	3/12
	[kx]	4/5	1/5	0/5
D	[k]	0/4	1/4	3/4
	[kx]	0/1	0/1	1/1
E	[k]	2/5	2/5	1/5
	[kx]	1/1	0/1	0/1
F	[k]	8/11	3/11	0/11
	[kx]	1/1	0/1	0/1
G	[k]	8/8	0/8	0/8
	[kx]	1/1	0/1	0/1
H	[k]	3/3	0/3	0/3
	[kx]	0/2	1/2	1/2

表 8. /k/が閉鎖有で出現する頻度と確率（位置別）

	語頭		語中		語末	
	頻度	確率	頻度	確率	頻度	確率
[k]	54/76	71%	17/76	22%	5/76	7%
[kx]	7/15	47%	4/15	27%	4/15	27%
[k]+[kx]	61/91	67%	21/91	23%	9/91	10%

表 9. /k/が閉鎖有で出現する頻度と確率（母音別）

	i		e		ü, ö	
	頻度	確率	頻度	確率	頻度	確率
[k]	41/76	54%	17/76	22%	18/76	24%
[kx]	9/15	60%	3/15	20%	3/15	20%
[k]+[kx]	50/91	55%	20/91	22%	21/91	23%

位置別に見ると、表 6 と表 8 に示す通り、語中や語末に比べて、語頭での出現頻度が高いことが分かる。[k]の出現において、語頭の出現確率が約 71%であるのに対し、語中では約 22%、語末では約 7%であり、語頭での出現確率が甚だ高いと言える。[k]および[kx]での出現においても同様、語頭が約 67%であるのに対し、語中では約 23%、語末では約 10%であり、やはり語頭での出現確率が高いと言えよう。

母音別に見ると、表 7 と表 9 に示す通り、e の前や ü, ö の前の場合と比べて、i の前での出現頻度が高いことが分かる。[k]の出現において、i の前での出現確率が約 54%であるのに対し、e の前では約 22%、ü, ö の前では約 24%であり、i の前での出現確率が比較的高いと言える。[k]および[kx]での出現においても同様に、i の前が約 55%であるのに対し、e の前では約 22%、ü, ö の前では約 23%であり、やはり i の前での出現確率が高いと見なすことができる。

以上に見たように、本節では/k/の音声実現について、まず[k], [kx], [x]の 3 つが認められることを示し、そのうち最も出現頻度が高いのは、閉鎖音[k]ではなく摩擦音[x]であることを指摘した。次にオイラト語的特徴について、世代差の観点から、60 代以上では約 50%保持される一方で、50 代以下ではせいぜい 20%程度しか保持されていないことを明らかにした。さらに、オイラト語的特徴が保持される場合の出現環境から考察を加え、語頭や母音 i の前では保持されやすいのに対して、語中・語末や母音 e および母音 ü, ö の前では保持されにくいという傾向を示した。

4.2. モンゴル諸語との比較

栗林（1992b, 1992c）や孙竹（主编）（1990）等により、*k, *q の通時的変化を簡略化して示すと図 3 のようになる。*q は男性語、*k は女性語に現れる子音であり、母音調和規則に応じる。アラシャ方言の*q に遡る音は/χ/ [χ]であり、常に摩擦音として現れる。ステップ 1 は、*k, *q に遡る音の両方が閉鎖音で現れる段階であり、例としてドゥンシャン語やバオアン語が挙げられる。ステップ 2 は、*k, *q に遡る音の一方が摩擦音で現れる段階である。ステップ 2a は*k が摩擦音、*q が閉鎖音として現れるタイプで、例としてシラ・ユグル語が挙げられる。ステップ 2b は*k が閉鎖音、*q が摩擦音として現れるタイプで、例としてオイラト語や土族語が挙げられる。ステップ 3 は*k, *q の両方が摩擦音で現れる段階であり、例としてはハルハ・モンゴル語が挙げられる。

4.1.で述べたように、アラシャ方言の/k/は、閉鎖音として現れる場合が残っているものの、その多くは摩擦音として実現した。この事実は、アラシャ方言が元来はオイラト語と同様のステップ 2b に位置していたが、現在ではステップ 3 へ移行しつつある、即ち脱オイラト化が進行しているということを表していると言えるだろう。

	【*k, *qの両方が閉鎖音】		【*k, *qの一部が摩擦化】			【*k, *qの両方が摩擦化】
	ステップ1		ステップ2a	ステップ2b		ステップ3
*k	閉鎖音	>	摩擦音	閉鎖音	>	摩擦音
*q	閉鎖音		閉鎖音	摩擦音		摩擦音
（言語例）	ドゥンシャン語		シラ・ユグル語	オイラト語		ハルハ・モンゴル語
	バオアン語			土族語		

図 3. *k, *q の通時的変化

5. 破擦音/č/, /ǰ/の分析

5.1. データ

/č/, /ǰ/について、アラシャ方言と内モンゴルの他方言との対応は、表 2 に見た通りである。格日勒图（2013）は、/č/, /ǰ/の異音について(1)のようであると述べる。本節では/č/, /ǰ/の実現について、母音 i の前とその他の環境という 2 つの環境別に考察を与えてゆく。

(1) /č/ [tʃ] / 母音 i の前　　/ǰ/ [dʒ] / 母音 i の前
[ts～tʂ] / その他の環境　　[dz] / その他の環境

表 10 は/č/の実現について、調査結果をまとめたものである。i の前での/č/の実現において注目すべき点は、話者 A, C に、[tʃ]ではなく[ʃ]が現れる、ホルチン方言と同様の特徴を持つ例が観察されたことである。また i の前以外での/č/の実現について見れば、話者 C, F, G, H に、[ts]ではなく[tʃ]が現れる、チャハル方言と同様の特徴を持つ例が注目すべき点として挙げられる。

表 11 は/ǰ/の実現について、調査結果をまとめたものである。/ǰ/の実現についての注目すべき点としては、i の前以外の環境で、話者 B, E, G, H に[dz]ではなく[dʒ]が現れる、チャハル方言やホルチン方言と同様の特徴を持つ例が観察されたことが挙げられる。これらの現象には、内モンゴルの他方言との接触の影響を受けたことに起因する変異であるという可能性が十分に考えられる。

表 10. /č/の実現（話者別）

話者	iの前		iの前以外	
	[tʃ]	[ʃ]	[ts]	[tʃ]
A	23/24	1/24	7/7	0/7
B	16/16	0/16	4/4	0/4
C	33/35	2/35	15/18	3/18
D	34/34	0/34	18/18	0/18
E	35/35	0/35	18/18	0/18
F	35/35	0/35	17/18	1/18
G	35/35	0/35	15/18	3/18
H	35/35	0/35	15/18	3/18

表 11. /ǰ/の実現（話者別）

話者	iの前	iの前以外	
	[dʒ]	[dz]	[dʒ]
A	2/2	13/13	0/13
B	2/2	6/10	4/10
C	7/7	19/19	0/19
D	7/7	19/19	0/19
E	7/7	18/19	1/19
F	7/7	19/19	0/19
G	7/7	18/19	1/19
H	7/7	18/19	1/19

5.2. モンゴル諸語との比較

栗林（1992a, 1992b, 1992c）、孙竹（主编）（1990）や Skribnik (2003)に基づき、* č, * ǰ の通時的変化を示すと図 4 のようにまとめられる。タイプ A は、* č, * ǰ の両方を保存し、脱口蓋化による分裂が生じていないタイプである。例として、チャハル方言やホルチン方言が挙げられる。タイプ B は脱口蓋化による分裂が生じたタイプであり、ハルハ・モンゴル語やオイラト語がこのタイプに属する。タイプ D は脱口蓋化による分裂が生じた後で、それぞれが摩擦化したタイプであり、例としてブリヤート語が挙げられる。

アラシャ方言について言えば、本来はオイラト語と同様のタイプ B に属していたと推測されるが、5.1.で示したように、i の前以外の環境で後部歯茎破擦音の[tʃ]や[dʒ]が現れる例があったことを踏まえると、脱口蓋化による分裂が生じた後に、言語接触等の要因で、一部が口蓋化し中和しているタイプであると言える。アラシャ方言の状態は、タイプ B に近いものの、一部が中和を起こしている点でタイプ B と同様ではない。一方で、口蓋化による一部の中和という変化は、タイプ D に見られるようなそれぞれの摩擦化ほど完全に生じているものでもない。したがって、タイプ B とタイプ D の間にタイプ C として位置づけることが妥当であると思われる。

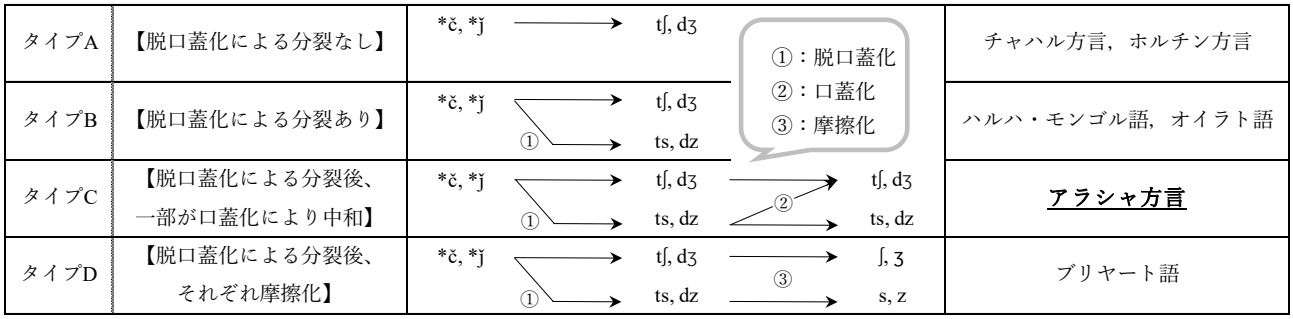

図 4. * č, * ǰ の通時的変化

6. まとめと今後の展望

本発表では、まず阻害音/k/の音声実現の実態から、脱オイラト語化が 50 代以下の話者に顕著であることを明らかにした上で、モンゴル祖語の*k, *q の摩擦音化の過程において、アラシャ方言が 1 つの中間的な段階にあることに言及した。次に破擦音/č/, /ǰ/の音声実現の実態から、内モンゴルのチャハル方言やホルチン方言等と同様の特徴を持つ例に着目し、言語接触の影響の可能性を指摘したのち、モン

ゴル祖語の*č, *ǰ の通時的変化の過程において、脱口蓋化による分裂後、一部が口蓋化により中和しているという脱オイラト語化の過程にあることを示した。

破擦音/č/, /ǰ/の分析において、論点の複雑化を避けるために扱わなかった、いわゆる「*i の折れ」を含む議論は機会を改めて論じたい。

本研究の貢献は、1）個別言語の記述として世代差を踏まえた具体的な記述を行った上で、通時的観点からも考察を加えた点、2）言語接触の影響を受けた言語がいかに従来の特徴を保持し消失していくかという、通言語的研究にも有用なデータを提供しうる点でその価値が認められよう。

謝辞

本発表は、JSPS 特別研究員奨励費 19J20571 の助成を受けている。調査に協力してくださった話者の方々と、有益な助言をくださった角道正佳氏をはじめとする諸氏に、末尾ながら心からの謝意を表する。なお本発表における全ての誤謬は発表者に帰するものである。

参照文献

Birtalan, Ágnes (2003) Oirat. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 210-228. London: Routledge. / 东北三省蒙古文教材编委会（编）（2009）『中学生蒙古语语法写作基础知识』. 沈阳：辽宁民族出版社. / 額尔德尼・格日勒玛（编）（1990）『蒙古语常用词汇』. 乌鲁木齐：新疆人民出版社. / 哈斯图亚（2011）「阿拉善土语语言地理研究」硕士论文，内蒙古大学. ／ Janhunen, Juha (2003) Mongol dialects. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 177-192. London: Routledge. / 栗林均（1988a）「オイラト語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典　第 1 巻　世界言語編（上）』971-974.　東京：三省堂. / 栗林均（1988b）「カルムィク語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典　第 1 巻　世界言語編（上）』1300-1306.　東京：三省堂. / 栗林均（1989）「内蒙古語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典　第 2 巻　世界言語編（中）』1426-1434.　東京：三省堂. / 栗林均（1992a）「ブリヤート語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典　第 3 巻　世界言語編（下- 1）』814-827.　東京：三省堂. / 栗林均（1992b）「モンゴル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典　第 4 巻　世界言語編（下- 2）』501-517.　東京：三省堂. / 栗林均（1992c）「モンゴル諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典　第 4 巻　世界言語編（下- 2）』517-526.　東京：三省堂. / 纳・格日勒图（2013）『阿拉善土语研究』. 呼和浩特：内蒙古人民出版社. / 斎藤純男（2012）『モンゴル語史研究入門』，草稿 2012 年版. 東京学芸大学. / Skribnik, Elena (2003) Buryat. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 102-128. London: Routledge. / S・嫫嫫，Y・孟和阿木古楞（1990）『现代蒙古语及其方言』. 呼和浩特：内蒙古教育出版社. / 孙竹（主编）（1990）『蒙古语族语源词典』. 西宁：青海人民出版社.